

永久保存
特別号

W杯 新ドイツ代表「現地ルポ/完全特集」

双葉社スーパームック

2018 ISSUE

89

S O C C E R C R I T I Q U E



ドイツ代表監督

レーヴ

Joachim Löw

「レーヴ戦術論2.0」

W杯“世界最強”「代表チーム」作りの教科書

テンポフットボール+ポゼッション 「3バック」と「4バック」併用 高速カウンター
ゼロトップ 「ボール保持時間」の短縮 分析ソフト ハイラインプレス

絶対王者の「勝利の理論」独占インタビュー

INTERVIEW



ミュラー(MF)



ボアテング(DF)



クリンスマン(前代表監督)

気鋭のスポーツビジネスコンサルタント 並木裕太

ビッグ・クラブへの方程式

日本代表「欧州型」強化の条件

日本代表に集食う

「国内組」と「海外組」という概念

国内組と海外組の融合。日本代表が、Jリーグ所属選手とヨーロッパを中心とした海外クラブ所属の選手によって構成されるようになってから、よく議論されるようになった課題です。そして日本代表における両者の割合は、W杯に出場を重ねるにつれ、海外組の方のウェイトが大きくなってきました。

前回の2014年ブラジルW杯に出場した日本代表メンバー23名のうち、海外組は11クラブから集められた12名。国内組は8クラブから集められた11名。海外組の人数は遂に過半数になりました。それから4年、2018年ロシアW杯に出場する日本代表メンバーは、この原稿執筆時でまだ発表されていませんが、海外組偏重の選手選考の傾向は大きく変わらないことが予想されます。そんな傾向から見て、Jリーグはこの4年間、日本代

2014 ブラジルW杯 「日本代表メンバー」

位置	名前	所属
GK	川島永嗣	スタンダード
	西川周作	浦和レッズ
	権田修一	FC東京
DF	内田篤人	シャルケ
	酒井高德	シュツットガルト
	長友佑都	インテル
	森重真人	FC東京
	今野泰幸	ガンバ大阪
	伊野波雅彦	ジュビロ磐田
	酒井宏樹	ハノーファー
MF	吉田麻也	サウサンプトン
	遠藤保仁	ガンバ大阪
	青山敏弘	サンフレッチェ広島
	山口蛍	セレッソ大阪
	長谷部誠	ニュルンベルク
FW	本田圭佑	ACミラン
	清武弘嗣	ニュルンベルク
	岡崎慎司	マインツ
	香川真司	マンチェスターU
	柿谷曜一朗	セレッソ大阪
	大久保嘉人	川崎フロンターレ
	大迫勇也	1860ミュンヘン
	齋藤学	横浜F・マリノス

※選手の所属は当時のもの

連載 第17回

自国のリーグと代表とは密接に関わっている。では、JリーグはこれからロシアW杯を迎える日本代表チームにどのような貢献ができたのか。その現状の分析から見えてくるのは、「南米型」から「欧州型」への転換、これまでの4年よりこれからの4年、という考え方だった。

構成◎伊藤亮 Ryo Ito
写真◎渡辺航滋 Koji Watanabe

表の強化に何か貢献できたのでしょうか。

Jリーグのこの4年間を振り返ると、様々な変化がありました。中でも最も大きな変化は、やはりDAZNとの契約でしょう。10年総額約2100億円という巨額の放映権料で契約したことにより、J1上位クラブへの理念強化配分金が支払われることが決まりました。この事実は、Jリーグにもビッグ・クラブが誕生する素地ができたことを示唆しています。

ただ、その理念強化配分金は、昨シーズンJ1を制した川崎フロンターレに今年になって支払われたのが初めて。つまり、DAZNとの契約で得られた放映権料の影響は、これから始まることです。ですから、今回のロシアW杯に大きな影響が及ぶと考えることは、少し早計なところがあります。

代表強化の2つの方針 「南米型」「欧州型」

21世紀に入ってから行われた4回のW杯（日韓大会、ドイツ大会、南アフリカ大会、ブラジル大会）の優勝国は、ブラジルとイ

タリア、スペインとドイツです。このチームのメンバーを見ると、ある傾向に気付かれます。ブラジルは欧州のビッグ・クラブに散らばりプレーする海外組選手を中心としたメンバー構成。イタリアとスペイン、ドイツは自国リーグの名門1〜2クラブ所属の国内組選手を中心としたメンバー構成となっています。

仮に海外組中心の代表構成を「南米型」、国内組中心の代表構成を「欧州型」と大別するとします。南米型は超一流の個々をそれこそバロンドール級の1人を複数人そろえ、圧倒的な実力で相手を凌駕するタイプ。対する欧州型は、限られたクラブから選手の大半を招集し、日頃培ってきた戦術やコンビネーションを代表にも持ち込み、高いチーム力で試合を支配するタイプです。

世界トップクラスから見ると、2つのナショナルチーム強化方針。これらを日本代表に当てはめた場合、どちらを採用する方が得策といえるでしょうか。

日本人の勤勉性や組織としてのまとまりの強さなどを考えても、欧州型の方が理にかなっているのは明白でしょう。

となると、必要になるのは自国リーグ、つまりJリーグに代表選手がそろえるビッグ・クラブです。イタリアならユベントス、スペインならバルセロナとレアル・マドリッド、ドイツならバイエルン。これらに匹敵するビッグ・クラブがJリーグにも生まれ、欧州型の強化方針を採れば、日本代表の姿は大きく様変わりする可能性が高まります。

ビッグ・クラブの出現が 日本代表の姿を変える

欧州型の強化方針を日本代表に持ち込む。この議論をすると、必ず次のような意見が出てきます。

「ブンデスリーガはレベルが高いから、自国の選手が海外に出ていくケースが少ない。だから代表強化もできる。スペインもイタリアもそうだ。でも、日本はそうはいかない」

確かに、現状はその通りでしょう。Jリーグで実績を積んだ選手の多くが、次なるステップとしてヨーロッパのクラブへの移籍を志すのは、もはや既定路線になっているといっても過言ではありません。ですが、もしJリーグが今後、アジアで最もサラーリが高いく、プレミアリーグやラ・リーガ、ブンデスリーガとまではいかなくとも、フランスやオランダと同じくらいのリーグレベルになったら——それでも日本人選手の欧州進出は減らないでしょうか。

お金の問題ではなく、欧州でプレーする夢に挑む日本人選手は、今後も一定の割合で現れるでしょう。しかし、もし欧州で活躍して得られるサラーリと同等の額がJリーグで支払われるとしたら、現状から少し様子が変わってくるはずですよ。

Jリーグがそのような存在に昇華していくチャンスは、今、やってきています。DAZNマネーの恩恵といえる「理念強化配分金」を、初めて受け取ったクラブである昨シーズンの覇者・川崎フロンターレを例に考えてみます。まず、理念強化配分金を使っ

て選手補強をする際、外国人選手ではなく、海外クラブで活躍している日本代表選手を獲得していきます。そしてリーグで結果を出し続ける。もし連覇を続けられれば、毎年高額の理念強化配分金を手に入れますから、そのつど日本代表選手を獲得していきます。すると、チームの大半が代表クラスの選手で占められることとなります。そんなチーム状況を作り上げ、日本代表に川崎のシステム、戦術を持ち込む。日本代表のシステム、戦術ありきで選手を選ぶのではなく、川崎のシステム、戦術ありきで選手を選ぶのです。当然、主力となるのは川崎でプレーする代表クラスの選手たち。彼らは日頃から慣れ親しんだシステムと戦術でプレーできますから迷いがありません。さらに連係面も鍛えられていますから、代表チームでもその強みを活かせる。これまでの日本代表のチーム力は、選手個々の能力を足していたものだったのが、選手個々の能力を掛け合わせたものになる。その総合力の差は想像以上に大きなものになるはずですよ。

ロシアW杯は 「南米型」日本代表の集大成か

Jリーグの特定のクラブをベースに代表のサッカーを構築していく。この欧州型強化方針をいち早く実現させるために、まずはビッグ・クラブを誕生させることが条件になります。その誕生の近道は、過去の連載でも言及していますが、毎シーズン同じ1〜2クラブが優勝し続けることです。理念強化配分金が特定の1〜2クラブに集中するこ

とで、代表クラスの選手がバラけずに集中していく。その状況が、さらにクラブのブランド力を高めていく。結果、ビジネス規模も大きくなる。この循環で、世界に伍するレベルに高めていくのです。

いくつかの条件があるにせよ、ロシアW杯前の4年間より、ロシアW杯後の4年間のほうが、Jリーグの日本代表への貢献度が高まる可能性は大きいと言えるかもしれません。これまでの日本代表の強化方針は、図らずも南米型でしたが、今回のロシアW杯は、その南米型の集大成となる大会になる可能性もあります。もし2022年カタールW杯から、日本代表における国内組と海外組の割合が大きく変わり、強化方針が欧州型へシフトしたら、「国内組と海外組の融合」という課題は、もはや懐かしい過去のものとなるでしょう。

なみき・ゆうた

慶応義塾大学経済学部卒。ペンシルバニア大学ウォートン校でMBAを取得。2000年、マッキンゼー・アンド・カンパニー入社。2009年に独立。フィールドマネジメントを設立。エレクトロニクス、航空、インターネット、自動車などの日本を代表する企業の経営コンサルタントを務める。スポーツ分野では、野球において、プロ野球オーナー会議へ参加、パ・リーグのリーグ・ビジネス、ファイターズやイーグルスなど多数のチーム・ビジネスをキーマンとともに作り上げており、サッカーでは、Jリーグのリーグ・ビジネス、ヴィッセルやベルマルレなどのチームビジネスのサポートを続けている。日本一の社会人野球クラブチーム「東京パンパタ」の球団社長兼GMでもある。著者多数。近著に『コンサルタント年史（ディスカヴァー・レポリューションズ）』。2016年3月、Jリーグ理事に就任。

